

(五) 難病平癒

難病平癒

昭和二十一年一月二十八日夜明方の靈夢は難病に苦しむ私の終りの日でありました。

悪業も病気も肉体も、総て不動明王の智火によって焼き尽くされて死者復活、いや迷いの子供が仏の子として生まれ替わらせて頂いたのです。

敷布団の上に座り不動明王のご真言を声を出さずに外が明るくなる迄念じ続け、朝六時の滝の修行に出かけました。全身は今迄と一変して軽快で、滝場の不動尊に土下座して御礼を申し上げて、いつもの如く滝に入り修行させて頂きました。氷の滝水も皮膚を切り裂くような感じもなく、感謝の心でいっぱい、水行終えて衣類を着けた時のすがすがしさは格別でありました。昨日まで続いていた下痢も「ピタリ」と止まり、咳や痰も出ません。

午後の発熱もなく、永年苦しみにいた結核も、うそのように無くなりました。

歡喜の修行

苦しみが大きければ大きい程喜びも大きく、健康の有難さがわかります。難病を助けて頂き心身は喜びと感謝で一ぱいであります。私は、不動明王さまにお誓いした如く、明王様のご眷屬とならせて頂き、明王さまの御心のままに、世の為人の為にお役に立つ修行者とならしめ給えと、寝てもさめても心の中で不動尊のご真言を念じ続けました。

食糧は相変らぬ麦の粥や芋等の最低の粗食でありますのに、体力は次第に出来て、嬉しい楽しい修行の日々となりました。秋九月中旬に私が蒔いたそら豆やえんどう豆が、春の光を受けて花咲き実をつけ出し、滝の下の土手にはせりやふきが顔を出します。それを採集して食膳に運ぶのも楽しい事でした。

瘦せ細った体も少しづつ回復したので、K先生と二人で故郷の愛知県の岩倉に喜びの報告に行きました。母は涙を流して喜び、父は顔をほころばせ、度々食糧を運んでくれた長兄もそのかいがあつたと喜んで、暗かった我が家も明るさが戻り、私の病が家中の人を苦しめていた事、特に親不孝をしていた事を痛感したのであります。

活気づいた山の行場

私の難病がよくなった事で評判になり、難病の人達が救いを求めて、参籠を希望する人が次々と来山し、先生のお弟子さん方も修行に登り、山の籠堂は満員となりました。私はその人達の雑用を喜んで引き受けて走り廻り乍ら、心は常に不動尊のご真言を念ずる事を怠らず励みました。

桑名市聖衆寺、私の師僧の奥さんも、この滝場で修行することを希望されまして、私は

奥さんの代りに聖衆寺に行って、奥さんの代務のご祈祷を未熟乍ら一ヶ月程させて頂きました。

K先生の処でお世話になり始めてより一ヶ年が経過して、いかなる修行にも耐えられる自信が出来て、求道心は更に燃え上がって来ました。高野山へ修学に登りたい、伝灯の真言密教を学びたいと、亡師僧の奥さんをお願い致しました。奥さんは、私の願いを聞き入れられ、高野山安養院住職の大原智乗大僧止の弟子に入れて頂き専修学院へ進む道を開いて下さいました。

火灯の修行

(六) 火灯の修行